

『再臨主の証明』 武田吉郎・著

【主要参考文献】

*印は韓国語（朝鮮語）の書籍

◆全体を通したもの

- * 『文鮮明先生御言選集』 文鮮明先生御言編纂委員会編者、成和出版社
- * 『史報』 世界基督教統一神霊協会（後、世界平和統一家庭連合）歴史編纂委員会
成和出版社
- * 『統一世界』 月刊誌、世界基督教統一神霊協会（後、世界平和統一家庭連合）
成和出版社
- * 『真の父母様の生涯と摂理 1』 歴史編纂委員会編著、成和出版社 2009年
- * 『統一教会 実録』 世界平和統一家庭連合 歴史編纂委員会、成和出版社 2007年
『真の御父母様の生涯路程①～③』 韓国歴史編纂委員会、光言社
『ファミリー』（後、『TODAY'S WORLD JAPAN』に改称）
世界基督教統一神霊協会の月刊誌、光言社

◆第一章

- * 『郷愁』 歴史編纂委員会編著、成和出版社 2009年
- * 『定州郡誌』 定州郡誌編纂委員会 1975年
『聖地定州』 武田吉郎 光言社 1995年
『大正九年 朝鮮総督府観測所年報』 朝鮮総督府観測所
『昭和九年 郡勢一斑』 定州郡編纂
『宗族的メシヤ』 世界基督教統一神霊協会 光言社 1993年
『植民地期朝鮮の社会と抵抗』 飯沼二郎・姜在彦編者、未来社 1982年

◆第二章

- * 『史報』 通巻 151号、155号、世界平和統一家庭連合
歴史編纂委員会 林南淑、朴敬道氏の証言
- * 『統一世界』 世界基督教統一神霊協会 1987年6月号、元老インタビュー 文龍基
- * 『宗教学研究 第輯』 1995年12月号 ソウル大学校 宗教学研究会
‘以生列修道院’小考 崔重炫
『早稲田大学附属早稲田高等工学校要覧』 早稲田高等工学校発行 昭和十三年

- 『早稲田大学百年史 別巻Ⅱ』早稲田大学大学史編集所編集
早稲田大学発行、平成元年
- 『戦時下抵抗の研究 I』同志社大学人文科学研究所編 みすず書房 1968年
- 『文鮮明先生の日本語による御言集3』日本歴史編纂委員会、光言社 2002年
- 『鹿島建設百三十年史 上・下』鹿島建設社史編纂委員会編者
- 『朝鮮人学徒出陣』姜徳相著、岩波書店 1997年

◆第三章

- * 『史報』通巻156号、同、金仁珠、金元弼、玉世賢氏の証言
 - * 『史報』通巻157号、同、朴正華氏の証言
 - * 『証言 信仰手記 第1輯』世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編
成和社 金仁珠、池承道 1982年
 - * 『証言 信仰手記 第2輯』世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編
成和社 玉世賢 1984年
- 「中和新聞」世界基督教統一神霊協会の機関紙、1993年9月1日、9月15日付
「統一教会の草創期を語る（上・下）」金仁珠
- 『愛の奇跡』北朝鮮・興南収容所の真実 武田吉郎・竹谷亘生著 光言社 1995年
- 『南北朝鮮キリスト教史論』澤正彦著 日本基督教団出版局
- 『韓国キリスト教史』閔庚培著、澤正彦訳、日本基督教団出版局
- 『先駆者の道』金元弼他著 光言社
- 『信仰と生活』第2集 伝統の生活化 金元弼著 光言社
- 『感謝する信仰』鄭壽源箸 韓日人教会中央会編 光言社
- 『思い出の平壤』「思い出の平壤」刊行委員会編集
全平壤楽浪会発行、「獄中記」八木朝久

◆第四章

- * 『史報』通巻157号、同、朴正華氏の証言
- * 『証言 信仰手記 第1輯』世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編
成和社 姜賢實 1982年
- * 『天愛로 인도받은 삶』李耀翰著、成和出版社 2012年
- * 『統一世界』同、1980年7月号「故劉孝元先生の10周忌を迎えて」
- * 『受難の現場』世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編者 成和社 1983年
- 『ファミリー』同、1980年5月号、6月号
特別寄稿「先生との出会いと開拓への出発」姜賢實

『ファミリー』同、2000年7月号 「真のお父様に学ぶ伝道」 姜賢實
『信仰と生活』第2集 伝統の生活化 金元弼著 光言社 1987年
『戦争と平和：朝鮮半島一九五〇』朴明林著 社会評論社 2009年
「中和新聞」世界基督教統一神霊協会の機関紙、金元弼氏の講話
2002年2月15日、3月15日、4月1日、6月1日、6月15日、7月1日付

◆第五章

- * 『梁允永 回顧録』梁允永著 未来文化社
- * 『証言 信仰手記 第1輯』同、梁允永 1982年
- * 『証言 信仰手記 第2輯』同、金永雲 1984年
- * 『証言 信仰手記 第3輯』同、洪順愛 1986年
- * 『檀紀四二八八年学校年次報告』梨花女子大学校編
- * 『梨花七十年史』瀧天命著 ソウル新聞社
- * 『梨花八十年史』鄭忠良著 梨大出版社
- * 『真の父母様の生涯と摂理2』歴史編纂委員会 成和出版社
- * 『忠心奉天の道』洪順愛大母様の生涯と信仰 歴史編纂委員会編著
成和出版社 2007年
- 『受難の源流』文鮮明師の西大門刑務所収監の真相 武田吉郎 光言社 2001年
- 『ファミリー』2006年3月号 崔元福先生の歩み
- 『ファミリー』1994年9月号 黄煥栄氏の証言
- 『忠心奉天の道』実録・洪順愛大母様の生涯と信仰 歴史編纂委員会編著
成和出版社 2008年
- 『真の愛の勝利者』韓鶴子総裁還暦記念文集、成和出版社、2003年
- 『ファミリー』1997年11月号、世界基督教統一神霊協会
「侍義と精誠の生涯」洪順愛

おわりに

『文鮮明師とダンベリーの真実』「ダンベリー」編纂委員会、光言社 平成元年

【主な引用文献と注釈・参考】

凡例：(○巻○p) の表記は、* 『文鮮明先生御言選集』

(文鮮明先生御言選集編纂委員会編者、成和出版社) の巻数とページ数を意味する。

第一章 誕生前夜から京城学生時代（1917～1940）

一、神の召命を受けるまで

16P 「神よ願はくは今夜の集会をして汝の栄を顕はさしめ給へ、……余は謹んで其命に従はん」（『内村鑑三全集 24』岩波書店、446 p）。

18P （ ）内は内村自身による訳文（『内村鑑三選集 4』岩波書店、348 p）。

19P 定州で三月一日に独立運動を行わなかったため、汽車で人々が定州を通るときにはみな唾を吐いて、「これはきたない町だ、万歳も叫ばないような町だ」と叫んだ（『現代史を生きる教会』池明観著、新教出版社、206～207 p 参照）。

19～20P 三月三十一日正午ごろ、計画どおり数万の群衆が定州の中心街に集まった。……外国の新聞に「人類史上最悪の非人道的罪状である」と弾劾された（*『定州徳彦面志』徳彦面民会、202 p。*『定州郡誌』定州郡誌編纂委員会、338～339 p。*『独立運動史 第二巻』独立運動史編纂委員会篇、449～451 p 参照）。

20P 定州では独立運動に参加したのは五万五千人（一九一九年三月～五月）。平壤は三万人であったことと比べると、いかに大がかりであったかが分かる（『独立運動史 第二巻』同、501～502 p）。

20P 定州の独立運動に参加した人の中に、ある親子がいた。キリスト教徒の母親が、五歳の女の子を背負って独立運動に参加していた。その女子の名前が洪順愛。後に文師が結婚する韓鶴子女史の母親である（*『郷愁』歴史編纂委員会、成和出版社、308～309 p 参照）。

21P 大叔父の文潤國牧師について文師は、……「政治と信仰は別」という理由で断ったという（181 巻 251 p 参照）。

21～22P 昭和五年（一九三〇年）の定州郡の総人口は、約一三万五〇〇〇人（日本人、一三〇〇人を含む）で、……続いて商業、水産業、工業、公務・自由業と続く（『昭和五年朝鮮國勢調査報告 道編 第十巻 平安北道』朝鮮総督府から）。

【参考】定州郡徳彦面の昭和5年（1930年）の人口は、約1万6000人（日本人28人を含む）、世帯数は約2800戸。なお徳達面、阿耳浦面、伊彦面が1931年に合併して徳彦面に改称。

公務・自由業の中には、宗教家は92人（僧侶18人、牧師10人、その他の宗教家64人）、医療従事者は99人（医師66人、按摩・鍼灸師6人、産婆4人、薬剤師3人、歯科医師2人、その他）などがある。（同上）。

22P 穀物は米と粟が大半で、「定州米」は優良米として広く知られ、……昭和初期、東京にも移出されている（『農業統計書 昭和七年 平安北道』朝鮮総督府から）。

【参考】定州の果物といえば、長十郎を中心としたナシ（3239本）とブドウ（681本）の収穫高も、平安北道内の四割近くを生産していた。ちなみに定州の繭の飼育戸数は1866（文少年の家でも繭を飼育）、養蜂戸数は124である。家畜は鶏が7万6111羽、牛が1万934頭、豚が4611匹、馬は少なくとも312頭である（同）。

22～23P 一九〇四年、日本陸軍加納忠男中尉以下六人が定州に潜伏中、……「日露戦役記念碑」が建てられ、車窓からも碑を見ることができた（＊『定州郡誌』口絵参照）。

23P だが実際は、一九四六年に三八度線を越えて北朝鮮に入った後に天啓を受け、「鮮明」という新たな名前が与えられた（＊『真の父母様の生涯と摂理1』歴史編纂委員会編著、成和出版社、64p参照）。

【参考】1946年に平壤で伝道された車相淳牧師によれば、「龍明」から「鮮明」に改名するように啓示を受けたのは文師自身ではなく、当時、神の妻（夫人）と言われていた朴婦人（老婆）であった（＊『証言』信仰手記第2輯、世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編 車相淳氏の証言 192p）。

このころ文師は霊界において40日間壮絶な闘いをした。そこで勝利することによって、文師は神から人類のメシヤ（真の父母）の印を押された（本文147p参照）。なお朴婦人と文師との出会いは、1946年7月初旬頃（金元弼氏の証言、1996年11月7日）である。

24P 母親の金慶継は文師を身ごもったとき、黄金の二頭の龍が波を蹴って飛翔し、闇をすべて飲み込む夢を見た。母親はこの夢の話をつい文少年に語りながら、「おまえはむやみに生きることはできない」と言い聞かせたという（2008年10月22日の文師の説教から）。

24P 父親の文慶裕は手相や観相を観ることができ、「自分の手相には世界で最高の息子が生まれると出ている」と言って、いつも自慢していた（＊『郷愁』同、47p参照）。

25P 「当時、生活に困っていた女性たちは、……『私が一食抜けばいいんだ。その弱い女の身で子供たちを食べさせ、育てるのは苦労だね』と言いながら物を受け取らなかった」（『統一世界』同、1983年2月号、34～35p）。

25P 文師の母親である金慶継の姪に、……北朝鮮から韓国に行った村の人たちによれば、そのときのイエスが文師であったという（＊『郷愁』同、239～240p参照）。

26P 「健康で頭の回転が早く、性格はトラのように男性的で活動的だった。色は少し黒かったが背が高く美人で、とりわけ歯が白かった」（筆者による文昇龍氏へのインタビューから、1992年6月6日、ソウルで）。

26P 「（文師の）家では、米、小豆、大豆、粟、麦などを作っていた。……（文師の）母親は朝早く起きて食事を作り、農作業、機織りなど仕事は休みがなく、寝る時間は一、二時間くらいしかなかった」（筆者による文龍善氏へのインタビューから、1992年9月17日、京畿道九里市で）。

26P 文少年には双子の兄弟がいた。……文師は自分の子どもを母親のようにすることはできなかったという（1998年3月28日の文師の説教から）。

27P 「お父さん！ お母さん！ あれほど待っていた息子が帰ってきたのですから起きてください。なぜ返事がないのですか」……「神の仕事をして、ただいま戻りました。生前に親孝行することができず胸が痛みます。しかし天におられて私がしていることをご存じですね」（＊『統一世界』同、1992年3月号、111p参照）。

30～32P 文少年は自然と触れ、語り合うだけではなかった。生き物であれば何でも捕まえた。……ウナギを捕りにいかないように家族は引き止めたという（筆者による文昇龍氏

へのインタビューから、1992年11月20日、ソウルで)。

35P 「ある年の七月の夕方、……彼らが出発するときは兄が母親(金慶継)に頼んで、彼らに小遣いを上げていました」(筆者による文龍基氏へのインタビューから、1992年10月9日、ソウルで)。

35P 「私が見旨を知る(神の召命を受ける十五歳)前に考えていたことは何かといえば、……すべての人の友達以上の道を行かなければならないと思ったのです」(117巻118p)。

35P 「うちの本家の小さい奴(文少年)は、時代を間違えて生まれてきた。逆賊にならなければ王になるタイプだが、日本の統治下では監獄に行つて死ぬ以外ないだろう」(1989年1月1日の文師の説教から、『ファミリー』同、1989年4月号、60p参照)。

36~37P 文少年とともに書堂に通つた従兄弟の文龍善氏によれば、……自分に代わつて手本を書かせ、習字の採点をさせたこともあつた(筆者による文龍善氏へのインタビューから、1992年12月1日、京畿道九里市で)。

37P その教会に掲げられた看板「イエス教明水台禮拜堂」(イエスはハングル)は、一九歳の文青年が書いたものである(『史報』同、1985年5月号、表2参照)。

39P 文師の実妹である文孝善さんのルビについて

【参考】文孝善は北朝鮮の地域によっては、「문호선(ムン・ヒョウソン)」ではなく「문호선(ムン・ホソン)」と表記し発音する。許孝彬の「孝」も同様である(本文137p)。

39P 「勉強が良くできて、人々に褒められるのも聞きました。……話す声を聞いていれば、話が余りにもうまく優れているので人気を集めました」(『ファミリー』同、1997年2月号、62p)。

41P 「自分は何者か、どこから来たのか、……この地球上にはなぜ数多くの苦しみがあるのか」(102巻288p)。

42P 「私は一六歳(数え年)の時に、……『苦痛を受けている人類のゆえに、神様は悲しんでいらっしゃる』とおっしゃいました」(134巻145p)。

42P 「私が幼いときのこの体験を言葉でみな表現するのは、……今の『統一原理』の核心になるのです」(120巻119p)。

45P イエスは後年「その日(四月一七日)は自分が復活した日である」と文師に告げられたという(4巻181p参照)。なお1935年の既成教会における復活節は4月21日。

46P 「クリスチャンに『イエス・キリストが今日、あなたのもとに再び来られたら、あなたはどうしますか』……あなたの答えは『ノー』と言うに決まっています」(『為に生きる一文鮮明講演集一』光言社、138p)。

47P 当時の校長は……、教員は一七人(うち日本人六人)、生徒数は第一学年から第六学年まで合わせて一〇四七人であつた(『日本植民地教育政策史料集成 朝鮮篇第59巻』昭和9年(1934)5月末現在、朝鮮総督府学務局)。

47P 「文先生の担任であつた兄の金泰善が……女学生たちから“エアボジ(お父さん)”と呼ばれていました」(*『史報』同、通巻51号、18~19p参照)。

二、修道と真理探究に明け暮れた学生時代

49P 学生生活を過ごした黒石町。黒石町の地名について。

【参考】1936年4月1日に京城府に編入され黒石町となり、1943年6月10日に永登浦区黒石町となる。黒石洞と改称したのは、1946年10月1日である（*『ソウル地名辞典』ソウル特別市史編纂委員会、968p参照）。なお銅雀区黒石洞となったのは、1980年4月1日からである。

50～51P 「明朗活発 質実剛健ニシテ 自ラ進ミテ事ニ當リ熱心ナリ 身體強健ニシテ 出席情況良好 蹴球ヲ好ム」（*『史報』同、通巻151号、5p）。

51P のちに文師が日本留学後に来日された一九六五年のとき、一九三九年に六九連勝した双葉山と相撲をしてみたかったと語られたことがある（『文鮮明先生の日本語による御言集3』日本歴史編纂委員会、光言社、126p参照）。

51～53P 京城商工実務学校で文昇龍氏のクラスに、……文青年が相撲のチャンピオンになった（筆者による文昇龍氏へのインタビューから、1992年6月6日、ソウルで）。

54P 朝鮮総督府の高等法院検事局思想部の「支那事变後に於ける基督教徒の動静と其の犯罪に関する調査」には、……独自の立場から布教を開始したとある（『思想彙報』第16号、高麗書林、8p参照）。

55P イエス教会は創設から四年にもならないうちに礼拝堂二五か所、信徒二千数百名を獲得した。平壤には煉瓦造りの立派な三階建ての礼拝堂が建てられたが、貧寒な信徒の力によってのみ実現されたものであった（『メトロポリタン史学』第4号「植民地朝鮮におけるキリスト教系終末運動の展開と民衆」、39～40p参照）。

55～56P イエス教会所属の明水台教会は、他の教会にはない神霊的な面があったと文青年とソウルで同じ部屋で過ごした文昇龍氏はいう。……文昇龍氏は教会に通いながら、不信感を抱いたことは一度もなかった（*『史報』同、通巻151号、56～57p参照）。

56P 「その当時、文先生は体格もよかったです、……また夫婦として生活できるのかという話だったようです」（*『史報』同、通巻151号、62～64p）。

57～58P ある年、朴在奉牧師を迎えて明水台教会の礼拝堂で復興会が開かれた。最終日の早朝祈祷会で朴牧師が言った。……その学生こそ文青年であった（*『史報』同、通巻56号、26p参照）。

59P 兄の下宿屋には一部屋に二人ずつ泊まり、……下宿で一週間か一〇日間、食事を取らなければ、払う下宿代が少なくて済んだからである（筆者による朴敬道氏へのインタビューから、1993年8月6日、ソウルで）。

61P 一九四〇年を例に挙げれば、朝鮮神宮参拝者数はおよそ二一五万人（一日平均、約五九〇〇人）を超す。その後も参拝者数は増えている（『日本帝国主義下の朝鮮伝道』飯沼二郎、韓哲曦著、日本基督教団出版局、207p参照）。

61～62P 「そのときは日本の統治下であったため一か月に一回、朝鮮神宮に行って神社参拝をしました。……それだけでなく文先生は、立ち振るまいがとても上品で大人っぽいのです」（*『統一世界』同、第245号、124p）。

第二章 日本留学時代と「光復節」(1941~45)

一、 日本留学時代

66P 下宿先から龍山駅（京城駅の隣の駅）に向かった。

【注】文師の説教の中には、釜山に行くため京城駅（ソウル駅）と龍山駅から乗車したという内容が混在している。下宿していた場所が黒石町であることから、龍山駅から乗車したと思われる。

66P 「青年よ、お父さんかお母さんが亡くなられたのですか。そのような悲しみは人間であれば誰でも遭うことではないですか」（39巻 62p）。

66~67P 「私の悲しみは、ただ国を愛する心でぎっしり詰まっていたのです。……その哀切な訴えがこの民族の前に必ず残る、ということを私は知っていました」（1969年2月2日の文師の説教から）。

67P 文青年が京城を出て八時間以上、急行に乗って釜山栈橋に着いたのは、三月三十一夜のことである。

【参考】昭和16年3月号の『時間表』による龍山駅発、釜山栈橋着の急行の時間表は以下の通りである。

急行 午後1時1分 龍山駅発→午後9時32分 釜山栈橋着。

急行のぞみ 午後1時51分 同 →午後10時15分 同。

急行大陸 午後2時30分 同 →午後10時35分 同。

急行ひかり 午前3時26分 同 →午前11時20分 同。

*上記の各急行の京城駅発の時間は、龍山駅発の約6分前である。特急あかつきは午後3時50分京城駅発（龍山駅は通過）で、釜山栈橋には午後11時5分着である（『時間表』鉄道省編纂、昭和十六年三月号、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、日本旅行協会発行、参照）。

67P 時刻表通りに関釜連絡船が釜山を出港したとすれば、同月三十一日午後一時四五分発の8便か、四月一日午前零時五分発の1008便の不定期便である（『時間表』鉄道省編纂、昭和十六年三月号、同、参照）。

67P 「私は今、韓国を離れるけれども、祖国をよりいっそう愛し、祖国のためにもっと多くの涙を流そう」（22巻 123p）。

67~68P 「かわいそうなこの民族を誰が束縛から救ってくれるのでしょうか。……『私は今旅立ちますが、帰ってくる時まで、神様、この民族を守っていてください』（39巻 62~64P）。

69P その間の卒業生数累計は、九二一九人（電気科、二四三四人を含む）。（会報「稲工」No.36、3p。『早稲田大学百年史 別巻Ⅱ』早稲田大学、585~586p参照）。

【参考】1943年9月の高等工学校卒業生数は581人（電気科125人を含む）。

・写真のキャプションについて 69、71、83pの卒業写真は、「早稲田高等工学校電気工学科卒業アルバム・皇紀2603年」を指す。

71P その前日（一〇月一五日）戸塚道場で、早稲田大学生が参加した「学徒出陣壮行会」が行われている。

【注】早稲田大学の「学徒出陣壮行会」が11月15日に行われたという資料もあるが、これは誤り。

75P 文青年と交流を深めるきっかけは、「葉銭会」という朝鮮独立運動のための組織の役員になったことであった。……したがって「葉銭会」とは、朝鮮人の会を意味して創られた会であった（筆者による厳徳紋氏へのインタビューから、1994年11月18日、ソウルで）。

75P 文青年は下宿と一緒に住む共産主義者である金昌淳、張鳳熙らとともに、……彼らが朝鮮に帰ってしまったためこの計画は頓挫した（*『統一世界』1987年5月号、130p参照）

75P 「日帝のとき学生でしたが、共産党と連帯して日本帝国主義と闘いました。そのときはそれしか方法がありませんでした」（『TODAY'S WORLD JAPAN』通巻513号、89p）。

76P ちなみに同氏は韓国において、韓国建築家協会理事（一九六三年）、同協会長（一九七〇年）、大韓民国建築大典運営委員長（一九八三、八五）などを歴任し、一九九六年に玉冠文化勲章（美術部門）を受章している（隔月刊『PA PROARCHITECT』世界建築家厳徳紋、1998年3月号、通巻第8号）。

78P 「まじめで熱心に勉強しておられました。下宿に帰られるのは、夜の十時ごろだったと思います」（『聖所を歩く一早稲田・高田馬場一』聖所巡礼の会、42p）。

79P 当時（一九四一年末現在）東京には、朝鮮人留学生が一万五千三百八人（内訳、私立大学二六二〇人、高等学校・専門学校約三四九七人他）で、なお毎年増加する傾向にあった（『在日朝鮮人関係資料集成』第四巻 朴慶植編、三一書房、871p）。

79～80P 『特高月報 昭和十八年十二月分』（内務省警保局保安課）に……宣伝煽動したことが記録されている（『特高月報』昭和十八年十二月分、内務省警保局保安課、125p。『昭和特高弾圧史8』明石博隆、松浦総三編、太平出版社、168p）。

83～84P 「韓国が日本の政権下にあった時、先生（文青年のこと）は、その牢屋（警察署）の中に何回も入れられた。……しかし、共産主義の友達とね、政経科があるだろう、その友達と論争したよ」（『文鮮明先生の日本語による御言集3』同、300～301p）。

85P 「動物世界を見れば、生まれるとき、目がまず生じるようになります。……生まれる前にそのようなことがあることを知って生まれたのです」（『真の家庭と世界平和』世界基督教統一神霊協会編著、光言社、203p）。

86P 「五年前から夢や幻で、ある美男子の青年がずーと私を指導してきたのです。……正面から見ても歩く姿を見てもそっくりです」（1992年2月8日の文師の説教から）。

88P その乗船予定の関釜連絡船・崑崙丸は、乗客四七九人を含む合計六五五人を乗せ、……そのため五八三人が亡くなった（『関釜連絡船』広島鉄道管理局、97p。『関門海峡渡船史』澤忠宏著、梓書院、237～238p参照）。88 その中には二人の国会議員も含まれてい

る（「朝日新聞」1943年10月12日付、崑崙丸遭難者氏名参照）。

【参考】下関の日和山公園に1960年建立された崑崙丸戦没者慰霊碑の碑文には、魚雷の攻撃を受けた時間は「五日一時二十分」、死者は「乗組員百二十四名 船内警察官三名 税関吏二名 海軍警備兵二名 乗客四百五十一名」と刻まれている。総計582人である。

91P 友人の巖徳紋氏によれば、文青年と一緒に日本留学時代に富士山に登ったこともあったという（『TODAY'S WORLD JAPAN』同、通巻507号、36p）。91 ちなみに文師は富士山のことを「父子の山」と表現している（『TODAY'S WORLD JAPAN』同、通巻515号、55p）。

二、帰国後の逮捕と「光復節」を迎えて

92P ところがそこに向かう途中、「行ってはいけない！」との啓示を受け（『ファミリー』2007年4月号40p）。

93P その後（一〇月三〇日）、早稲田大学総長に文部次官から朝鮮人、台湾人の学生に対し、自ら進んで志願するように指導している（『ペンから剣へ—学徒出陣七〇年—』早稲田大学大学史資料センター編集・発行、2013年、10p参照）。

93P 文青年は同じ下宿に住んでいた人の紹介で、鹿島組（京城府漢江通）に一九四四年三月から電気技師として就職した（*『史報』同、通巻151号、64p）。

94P 「結婚後六、七年間別れて生活するようなことがあっても、それを克服して夫に従うように」（74巻97p）。

95P 一九四四年八月、日本が急変する戦局に対処して、民族独立のために運動する朝鮮人を取り締まるため、京城では警部六人、警部補一二人、巡查二五一人が新規増員された（『太平洋戦下終末期 朝鮮の治政』近藤弱一編 朝鮮史料編纂会、174p）。

95~96P 林南淑さん（李奇鳳さんの三女、当時一四歳）によれば……、逮捕された息子と警察部で会い、五日間ほど京城に留まり、泣きながら定州に戻った（*『史報』同、通巻151号、65p参照）。

96~97P 彼によれば早稲田大学政経学部の共産主義者が、日本の軍隊に入るのを拒み朝鮮に逃亡してきた……。「おまえの友人は誰か」と聞かれれば、日本の友人たちの名前をすらすらと言ったという（*『史報』同、通巻158号、29~34p参照）。

【参考】「飛行機」という拷問は、「飛行機乗り」「鶴の踊り」「空中戦」などと呼ばれることもある。

99P 「(文) 先生は終戦の約六カ月前に警察に捕らえられ、拷問をうけました。……身体が調子が悪い時には、それがたたってくるよ」と私におっしゃったことがありました」（『祝福』世界基督教統一神霊協会、光言社、第32号38p）。

99~100P 「血が何杯もあふれるほど、鞭でたくさん打たれました。……『打て！ お前の棒が強いのか、私の決意が強いのか、試してみよう』と、そのような闘いをしてきたのです」（75巻236p）。

100P 「一度は一四時間も取り調べを受け、拷問をされ、はって二〇メートルも行くこ

とができないほどになって、何度も気を失っては覚める、そうした過程がくり返されても、私は口を開きませんでした」(33巻 116 p)。

100P 「机の足四つが全部こなごなに折れていくように殴られて……、責任者としての自分の秘密を守るのです」(68巻 61～62 p)。

100P 「昔、日帝時代、監獄で私をひたすらに踏んでは殴った人がいました。……『こいつ、さあ、お前やってみろ。耐えてやろう。死ぬ境地に行っても耐えてやろう』と、そのように考えたのです」(110巻 330 p)。

100～101P 「私は彼らに怨讐のようには対しませんでした。……監房で悩みながら研究したのです」(217巻 74 p)。

102P 「怨讐という概念があれば、神様の子女になることができない。……それゆえ神様は『怨讐を愛せよ』と言われたのである」(『天地の大道』文鮮明著、成和出版社、71 p)。

102～104P 「文龍基氏の証言」(筆者による文龍基氏へのインタビューから、1992年11月17日、京畿道加平郡・清平で)。

105P 「父子である。父母と子女。神と人間が父子の関係である。天的心情、天的血統を中心とした父子の関係が宇宙の根本である」(『真の御父母様の生涯路程①』韓国歴史編纂委員会編著、光言社、203 p)。

107P 文青年が真理を解明するうえで、最も困難を窮めたのは何か。……文青年は十四年以上の間、血のにじむ霊的な祈祷生活を通して、天上世界のあらゆる秘密を調べていく中でこのことを知るようになった(『平和神経』宇宙平和連合編集、光言社、280 p 参照)。

107～108P 文師は米国と世界の宗教家、学界、政界、財界、および各界各層の指導者たちから八つの分野で、……⑧真の家庭の価値(『平和神経』同、279～284 p 参照)。①～⑧までの()内は筆者。

110P 文青年は京城(ソウル)の黒石町の下宿でこの日を迎えた。ソウルの地名について。

【参考】1945年8月15日、京城府をソウル市に改称。1946年9月28日、ソウル市をソウル特別自由市とし京畿道管轄から分離、1949年8月15日、ソウル特別自由市をソウル特別市と改称(『大韓民國地名便覧』2012年版)。

111P 神社参拝に反対し平壤刑務所にいた二〇人のクリスチャンたち(いわゆる出獄聖徒)は、……泣き声と讚美歌の混った異常な行列は、平壤市民の心をゆり動かしつつ前進した(『たといそうでなくても』安利淑著、待晨社、582～583 p 参照)。

111P 万歳をしようとしたが手が挙がらなかった(211巻 136 p)。

112P 「可哀そうなのは、負けた日本人である。もうすでに主権を失い、ひざまずいてわびるその者を打つ者は、神が罰する」……「拷問されないうちに、早く帰れ」(『御言集第一巻』歴史編纂委員会、254 p 参照)。

113P 一九四五年七月二九日、すべてのプロテスタント教会は教派の区別を廃止し、…約三〇〇〇人のキリスト教指導者たちが逮捕され、その内の約五〇人が獄中で拷問のた

め殉教している（『日本統治下 朝鮮の宗教と政治』聖文舎、81 p 参照）。

113P なお殺害予定人数や期日には諸説がある。

【参考】「日本政府は1945年8月15日に降伏したが、その時がもし8月17日を過ぎて降伏したならば、キリスト教徒は約20万名近くが虐殺されていた」と文師は語っている（*『真の御父母様の生涯路程②』同、成和出版社、29 p 参照）。

116P 李龍道は白南柱を先生と呼び、白南柱は李龍道を真の同志だと自称していた関係であった（『韓国キリスト教神学思想史』柳東植著、教文館、146～147 p）。

116P 李龍道が死後、金百文のところに来て、霊的に自分（李龍道）の使命を引き継がせたと文師はいう（23巻252 p 参照）。

117P 白南柱は金聖道と共に一時活動したが、二人は一つになって歩むことはできなかった（23巻269 p）。

120P 金百文はこの三月二日を「開天節」と呼び記念していた。……それはこの日、金百文は啓示を受け、集った人々の前で文青年の頭に手を置いて、ソロモンの栄光が文青年に臨むように祝福したことである（52巻150 p、*『真の父母様の生涯と摂理1』同、201、204 p 参照）。

【参考】文青年が金百文から祝福を受けたのは12月25日であるという文師のみ言（1971年9月21日、訪韓した日本統一教会幹部に日本語で語られたもの）もある。だが「一九四五年一〇月に金（百文）氏に会ったのです。……六か月後、金氏は天から啓示を受けて、彼は先生の頭に自分の手を置いて、全世界のソロモン王の栄光が先生に臨むように祝福したのです」（52巻150 p）、「三月の復活節を迎えて（金百文が）祝福した」（23巻283 p）などのみ言がある。

120P 金百文の説教（一九七九年三月二日）によれば、……三月二日を迎える一週間前から集会を開き、三月二日のために準備した（*『宗教学研究 第14輯』ソウル大学校、1995年12月、‘以生列修道院’小考、崔重炫著、178 p 参照）。

121～122P 文青年はそのため三八度線の北にある米の産地、白川に米を買いに行く途中、突然、「三八度線を越えろ！」という神の啓示を受けた。

【参考】白川は北朝鮮では「백천（ペクチョン）」ではなく「배천（ペチョン）」と表記し発音する。

122～123P 「先生はそのとき白川にお米を買っておいたのです。……五月二七日に命令を受けて出発し、六月六日に平壤に到着しました」（47巻186 p）。

【注】文師の説教の中には、1946年6月2日（23巻284～285）、同年6月4日（23巻253 p）に天啓を受けて平壤に向かったなどの記述もある。

第三章 北朝鮮での伝道活動と受難 (1946~50)

一、平壤での伝道と勾留

127P 「宗教は人民の阿片である。宗教は一種の精神的下等火酒である」は、革命家レーニンの言葉である (『レーニン全集第 10 巻』大月書店、70 p)。

128P この法令第三条 4 には「五町歩 (一町歩=〇、九九二ヘクタール) 以上を所有する教会、修道院その他宗教団体の所有地」 (『金日成著作集 2』朝鮮・平壤 外国文出版社、95 p)。

128P このため全体没収の約一・四パーセントに当たる一万五千余町歩 (『朝鮮民主主義人民共和国国民経済発展統計書』1946~1963、日本朝鮮研究所、1965 年発行、17 p 参照)。

* 『北韓共産化過程研究』(高麗大学校出版部) は一万四四〇一町歩、『南北朝鮮キリスト教史論』(日本基督教団出版局) は一万四四〇〇町歩と記されている。

128P 「北朝鮮臨時人民委員会の産業、交通、運輸、通信、銀行などの国有化に関する法令」 (『北朝鮮の経済 起源・形成・崩壊』木村光彦著、創文社、61 p)。

135P 一九四六年一月ごろ作成された、「北朝鮮保安事業総結報告」と題されているガリ版刷りの極秘文書がある。……「一九四六年七月から一月ごろの時点で朝鮮版秘密警察の人数は、一万五〇〇〇人ないし一万七〇〇〇人あまり」であったという (『朝鮮戦争』萩原遼著、文藝春秋、1997 年 132~133 p 参照)。

137P 『北韓教会史』(韓国基督教歴史研究所) には、聖主教会 (教団) の教会堂は一三、教会は九四 (一九四〇年) と記録されている (* 『北韓教会史』韓国基督教歴史研究所 北韓教会史執筆委員会、92 p 参照)。

137~138P 日本が終戦を迎える前、許孝彬は勾留されたことがある。……その言葉通りに、許氏は八月一五日に監獄から出るようになった (『ファミリー』1997 年 11 月号、67~68 p 参照)。

140~141P 「この保安署での拷問の方法はいろいろあったが、……八月一八日に釈放されたが、足の裏を殴られて一か月以上過ぎていたが歩くことができなかった」(森登吉氏の証言から)。

【参考】森氏は 1988 年 3 月 23 日から 26 日にかけて第 50 回日韓安全保障セミナーに参加するため訪韓した。帰国後、『思想新聞』(国際勝共連合) 昭和 63 年 (1988) 4 月 17 日号で次のように記している。以下はその一部である。

「なによりも感慨深いのは、46 年 8 月 11 日~19 日までの 9 日間は、国際勝共連合創始者の文鮮明先生と同じ大同保安署に留置されていたことである。なんとというめぐりあわせであったことか、言葉もない。拘留中の厳しい、思うだに身の毛のよだつ拷問のかずかずを振り返ったとき、ましてや文鮮明先生には、いかに厳しい拷問がかけられたであろうかと、静かに目をつぶらずにはいられなかった」

筆者が記した森氏の証言は、国際勝共連合本部に森氏について問い合わせをし、同氏の大同保安署での手記 (A 4、7 枚) を送ってもらったものを参考にしたものである。

143P だが同教会で解放前に牧師が、「うちの教会も神社参拝をしなくてはならない」と語ったことがある。……あ那时的女性が、文青年を訪ねてきた玉世賢さんであった（『史報』同、通巻156号、62p参照）。

146P 「ある者は髪を切られ、パンツだけになって追い出されて、……そういううわさがみんな、町を歩いて世界まで広がっているのです」（『私の生涯』在米日本人個団連合、光言社、27p）。

二、興南での強制労働と朝鮮戦争

155P 「彼らの宿舎は朝鮮人従業員用に建てられていた独身用合宿や社宅を改造し、……彼らの足は肉がなく細くて棒のようだった」（『北鮮の日本人苦難記』一日室興南工場の最後— 鎌田正二著、時事通信社、18p）。

157～158P 「硫安荷造りは一〇人一組でやっとな。……一〇人の連携プレーが百分の一秒狂っても合わん。一人一人の動作に百分の一秒の無駄があってもいかん」（『聞書水俣民衆史 第五巻「植民地は天国だった」』岡本達明 松崎次夫編者 草風館、147～148p）。

164P 「私（金仁鎬）は興南収容所にいたころ二十二、三歳でした。……不言実行であまり語ることはありませんでしたが、行動で私たちに見本を示してくれたのです」（筆者による金仁鎬氏へのインタビューから、1994年11月16日、ソウルで）。

165～168P 【一日のスケジュール】、【収容所での生活】（同上）。

176～179P 「共産党支配下での監獄生活がどんなものかは、皆さんにはよく分からないと思います。……自分のやるべきすべてのことを完遂したので、米国をはじめとする国連軍が北朝鮮を攻撃して、先生を解放したのです」（『ファミリー』同、1994年5月号の「統一教会史」、30～40p参照）。

179～180P 金元弼氏は一七歳で文青年と出会い、その後、……幸いこのときは看守に見つからなかった（筆者による金元弼氏へのインタビューから、1996年11月7日、東京で）。

182P 「忠母様（文青年の母親・金慶継女史）が数日後、家に戻れば、……家で誠意を込めて用意して行ったものなので、他人にみんな分けてあげるのも悔しくて泣かれた」（*『郷愁』歴史編纂委員会編著、65p参照）。

182～184P 母親は面会に行ったあと「二度と面会に行かない」と言いながらも、……このような状況の中でも、兄は決断して牛を売った（『祝福』一九九四年夏季号、113～114p参照）。

184P 「六月二十五日早朝四時を期して、米帝国主義者の指示を受けた南の兵士たちが、……同志たちはどのような事態が起こっても動揺せず、任された責任を完遂するように」（*『ソウルへの道』、金仁鎬著、図書出版民衆、128p）。

184P 興南肥料工場への爆撃は、一九五〇年八月一日である。B29爆撃機五〇機が、……総重量は七五〇トン以上に及んだ（『旧ソ連の北朝鮮経済資料集 1946—1965年』木村光

彦編訳者、知泉書館、216 p 参照)。なお砲弾 1500 発以上のうち約 1100 発は (興南肥料) 工場の敷地に落ち、爆弾は互いに 5-10-15m 間隔で落ちたと記されている。

【注】『北鮮の日本人苦難記』では、興南肥料工場に投下された爆薬は四〇〇トンであったとある。

185P 朴正華総班長によれば、一般人が二七〇〇人、囚人が二七〇人死亡したという (* 『史報』第 157 号 87 p)。なお『私は裏切り者』(世界日報)、* 『野録 統一教会史』(クンセム出版社、共に朴正華著) では、興南工場全体では約三七〇〇人、囚人は七〇人が死亡と記されている。

185P 「わが財界は救われたのである。朝鮮動乱は日本経済にとっては全くの神風であった」(日本銀行総裁、一万田尚登)、「天祐」(経団連会長、石川一郎)、「干天の慈雨」(富士製鉄社長、永野重雄)。(『昭和の戦争 10 朝鮮戦争・ベトナム戦争』講談社、96 p 参照)。

185P この特需は一九五四年二月末までの三年八か月間に、総額一三億二三〇〇万ドルの契約高を記録した (『統計資料第 90 号 特需に関する統計』昭和二九年三月 経済審議庁調査部統計課)。

186P さらに仁川上陸作戦の際、日本の船員が L S T (戦車兵員揚陸艦) を操縦した。九月一日に L S T 四一七隻が出発したが、……仁川は遠浅の海で日本人の船員が動かさなければ、上陸作戦は成功しなかったであろう (『これだけは知っておきたい 日本と朝鮮の一〇〇年史』和田春樹著、平凡社、195 p)。

186P 朝鮮戦争には一六か国が国連軍として派遣されたというが、白善燁将軍は一七番目の参戦国が日本であった (『若き将軍の朝鮮戦争』白善燁著、草思社、449~450 p)。

186~187P 「韓国軍が元山刑務所を訪れた時は、……井戸の中の水は血の色で、引き揚げられた死体だけでも一〇〇〇体に達した」(『戦争と平和：朝鮮半島一九五〇』朴明林著、社会評論社、47 p)

188P 「獄中生活は私に悲しみを与えませんでした。そこは私にとって、この上ない一番の道場でした。人間を真心で愛せるか、怨讐を真心で愛せるか、死刑囚と鼻を突き合すことができ、息を交わすことができるかということを考えることのできる道場でした」(26 卷 17 p、『真の御父母様の生涯路程②』151~152 p)。

188~189P 「二年八カ月の収容所生活で、私は共産体制の邪悪さを骨身にしみて体験しました。……人間の永遠の生命を否定するものであることを発見しました」(『続・為に生きる 文鮮明師講演集』光言社、106 p)。

189P 「共産党員たちは、全部が真っ赤な嘘つきです。……共産党は目的達成のためには、嘘、手段方法を意に介しません。謀略中傷は普通のことです」(163 卷 193~197 p)。

189P 「私が口を開けば、霊界が動員されて伝道してくれたのです。……あなたがもらったミスカルを持って行って、少しも手をつけないでその方にささげなさい」と命令したのです」(47 卷 187 p)。

189P 「一年に二回、リンゴ一個を配給してくれるのですが、……『リンゴを食べるときに私が世界で最初に、このような考えを持って食べる』という自負心を持って食べたの

です」(67 卷 154 p)。

190P 「私が監獄を去るとき、父母が自分から去ることよりも、もっと切ない心で涙を流す場を彼らに残してあげたいという心をもって活動してきました」(45 卷 138 p)。

第四章 釜山への避難と開拓伝道 (1951~53)

一、 平壤から釜山へ避難

192P 「中国の同志たちは、朝鮮への軍事援助供与について最終的な決定を採択した」(『朝鮮戦争の謎と真実』A・V・トルクノフ著、金成浩訳、草思社、177 p)。

193P 「刑務所内の惨状はすさまじかった。……遺体を葬ることすらしなかった」(『若き將軍の朝鮮戦争』白善燁著、草思社、277~278 p)。

193P 李承晩大統領は平壤を一〇月三〇日(諸説あり)に訪れ、平壤市庁広場で市民の熱烈な歓迎を受けた(『戦争と平和：朝鮮半島一九五〇』朴明林著、社会評論社、466、495、496 p)。

194P 「真の愛とは、どのような愛でしょうか。……そのような犠牲的愛です」(『平和神経』同、74 p)。

195P 一二月二日夜から国連軍は平壤から南に撤退を始めた(「朝日新聞」1950年12月3日、*『駐韓美軍30年』ソウル新聞社編著、杏林出版社、213 p、551 p)。同月三日、マッカーサー元帥は国連軍に平壤を放棄し、三八度線までの退却を命令(*『大韓民國史年表 上』國史編纂委員会、174 p)。

195~196P このとき平壤の大同江にかかる大きな橋(約六〇〇メートル)は国連軍の爆撃によって大きく損傷し、……彼はあまりの寒さのため写真を三、四枚撮っただけで、すぐに手がかじかみカメラを操作することができなくなってしまった(『ピュリツァー賞受賞写真全記録』ハル・ビュエル著、日経ナショナル ジオグラフィック社発行、36 p 参照)。

196P 一二月四日夕方から五日昼までに、大同江を渡った避難民の数は五万余名にのぼった(『韓国戦争 第3巻』韓国国防軍史研究所、かや書房、280 p)。

198P 「私が平壤に来たのは、平壤を第二のエルサレムにするためであった。しかし平壤の(キリスト教)聖徒たちが私を排斥したため、やがて平壤は共産軍の巢窟になる」(*『史報』同、通巻157号、89 p)。

203P この最も苦しい時、文青年は心の中で「人類救済の道において、これ以上の困難が訪れようと拒まず受け入れ、このような道が一生続いても行こう。そのような覚悟を神の前に誓うことのできるよいチャンスである」(*『統一教会史 上巻』世界基督教統一神霊協会編、成和社、78 p)。

203～204P 「文先生がどうしてあのような困難なことができたのか、今でも信じていけない」。……「この一人を天宙（地上と天上）の代わりとして考えたからこそ、天宙的な力が私に加わったのである」（『中和新聞』2002年4月1日号、金元弼氏の講話参照）。

205P 「そもそもサタン（悪の勢力の主体）は、……その恩賜と前後して、サタンの訴えを防ぐための試練が必ず行われるのである」（『原理講論』世界基督教統一神霊協会伝道教育局、光言社、402p）。

207P 文青年一行がソウルに到着したとき、食べ物は何一つ持っていなかった。……金氏は文青年の「三倍以上を返さなければならない」と言われたことは正しいと思い、「はい分かりました」と返答した。この返事を聞いてから、初めて文青年はご飯に手を着けた（『ファミリー』同、2002年12月号、54～56p参照）。

208P 「この瓜はどうしたのですか」……「私は飢えて死ぬなら死んでもよい。しかし得体の知れないものを食べたりはしない」（『文鮮明先生の教育哲学』世界基督教統一神霊協会世界宣教本部、光言社、367p参照。33巻282～283p）。

210P 「何千何万の哀れな民衆が中共軍の侵攻から逃れて、……昨日から寒さが特にきびしくなって、彼らの着のみ着のままの衣服はばりばりと凍っている」（『38度線はいつ開く』ビル・シン（申化鳳）著、サイマル出版会、294p）。

二、 釜山での開拓伝道

211～212P 「このほこりだらけの港町は、今いたところで悲惨な情景を呈している。……少しでも強い風が吹いたり雨が降れば、このような小屋はつぶれてしまう」（『38度線はいつ開く』同、295～296pからの抜粋）。

212P 「釜山の私の家で会ったときは戦争中でした。……とても納得できない話をしたからです」（*『史報』同、通巻158号34p参照）。

214P 厳氏は文青年の言行を通して、「自分の友達ではなく私の先生です。それだけでなく偉大な聖人であり、また哲人です」と言いながら、文青年に敬語を使い始め、何事においても文青年を優先して、手厚くもてなした（*『統一教会史 上巻』同、90p参照）。

214～215P 厳氏は浮浪者のような匂いのするジャンパー姿の文青年に、……厳氏は文青年が「再臨のイエス」であると信じた（筆者による厳徳紋氏へのインタビューから、1994年11月18日、ソウルで）。

215～216P 「藁半紙に鉛筆で書かれました。それがどれほど早く書かれたでしょうか。……それでそこにはそれ以上いることができず、さらに奥にある敷地を探し、そこに小屋を建てたのです」（韓国「PEACE・TV制作部」2009年12月7日、厳徳紋氏へのインタビューからの抜粋）。

216～217P 「文先生は平壤にいらっしゃったとき、すでに『原理原本』のようなものを持っていました。……ランプを点けると、文先生は読むように話されるのを私が書き取ったのです」（筆者による金元弼氏へのインタビューから、1996年11月7日、東京で）。

217～218P 「金百文先生は洗礼ヨハネの立場で、文先生の基盤をつくっていかねばならない立場です。……そうではないからこそ文先生は私に持って行かせ、『原理原本』を見せるようにしたのです」(同上)。

220～221P 文師が少年時代のことである。……「私はお金を使うことがあるので、何と何を持って行って売るので、そう思ってください」(58巻83p)。

222P 「神様はいたずらがとても好きな方です。『おいおまえ見ろ、今後世界がこのようになるのだ』と言われながら、大きな商船、天の商船に私を乗せて、数多くの群衆が歓呼するのを見せてくださりながら慰労されたのです」(148巻272p)。

224P 「(水晶山山頂から見ると)米国の船が一杯です。……一度歌い始めると二時間はかかるのです」(筆者による巖徳紋氏へのインタビューから、1994年11月18日、ソウルで)。

225P 「夜寝る時も先生は休まれないのです。……それに料理が上手で食べられないものがないのです」(韓国「PEACE・TV制作部」2009年12月7日、巖徳紋氏へのインタビューからの抜粋)。

237～238P 「姜先生が開いた聖書を文先生がのぞき込んで見て、三一節と言われたのではないですか」……そして『もう少し大きな声で、もう一度読みなさい』と言われたので、トーンを上げてもう一度読んだのです」(筆者による姜賢實氏へのインタビューから、1996年12月14日、東京で)。

244P 「先生はあれこれ、あらゆる曲折の路程を経ながら、まず同志たちを捜して回ったのです。……捜しに捜して彼らにみな会ったのちに、初めて家に連絡をしました」(22巻127～128p)。

244P 「私が会わなければならない人、神の前に誓い約束した数名の人々に会うことができなかったのも、彼らに会うまで待たなければならないのです。その人々に会うや否や(妻に)連絡したのです(47巻187p)。

246P 「その間、どれほど苦勞されたことでしょう。……死なずに追い出されずに生きてこられたので感謝するだけです」……「私が教えてあげた(あなたの)立派なお父さんです。ご挨拶しなさい」(127巻298p参照)。

247P 「文先生はお子様(聖進)が小学校に入学、卒業するときも行かれませんでした。……私にネクタイの結び方まで教えてくださったのです」(『祝福』創刊号、1973年秋季号、講話「家庭を捨ててまで私たちを愛した先生」金元弼参照)。

247P 金氏はこの釜山で文青年の祝禱を受け、八歳年上の鄭達玉さん(一九二〇～二〇〇〇)と家庭生活を始めた。文師の祝禱を受けて結婚した最初のカップルである(*『真の保母様の生涯と摂理1』同、307p参照)。

248P 鄭さんは文青年からもらった一枚の絹のハンカチがあった。……彼女は文青年に出会ったとき、同師の姿がイエス様の姿に変わったという体験を何度もしている(『生活伝道』金元弼著、光言社、114～115p参照)。

第五章 国家的弾圧と韓鶴子女史との歩み (1954~67)

一、 「梨花女子大事件」と西大門刑務所勾留

261~262P 「尊敬する内外のご来賓の皆様！ 紳士淑女の皆様！ ……このようなすべての苦難の路程において、背後で守り導いてくださった神様の深い愛に感謝いたします」(『文鮮明先生の御言 マルスム ポケット3 真のお父様の孤独なる四〇年生涯』、光言社、55~56 p)。

269P 「キリスト教が『統一原理』を受け入れていたならば、……李承晩大統領、朴瑪利亞、金活蘭を背景に、李起鵬が中心となって統一教会をなくしてしまおうと五大長官をして、私を監獄に入れたのです」(196 巻 165 p)。

274~275P 「一九五四年冬のある日、梨花女子大の教授が訪ねて来られたということで、……今でも『崔元福先生、ありがとうございます』と申し上げたい思いです」(『ファミリー』同、2006年3月号、77~79 p)。

275P 梨花女子大学で崔元福教授に続いて、統一教会を訪ねたのが宗教学と英語を担当科目としていた金永雲教授(社会事業科)であった。

【注】金永雲先生の役職の表記について。拙著『受難の源流』(文鮮明師の西大門刑務所収監の真相)では、金永雲先生の梨花女子大学における役職を『梨花八十年史』の巻末にある旧教授名簿に従い「副教授」とした。だが「梨花学報」(1954年9月27日付)では金永雲教授と記されているため、本書では金永雲教授とした。

285P 「最近になって統一神霊会という邪教団体が幽霊のように横行しているが、……これはあまりにも嘆かわしいことではないか」(*『한가람 봄바람에 梨花100年野史』閔淑鉉・朴海璟共著 知人社、301 p)。

295P 「文先生は夜の一二時ごろまで、私の家で信徒たちに語られることがありました。……その部屋の窓は黒い毛布で覆っていたので、いろんな憶測を呼んだのでしょう」(*『証言』信仰手記第1輯、世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編、梁允永、154 p)。

296P 質問：どこから由来した言葉か知らないが、……万一そのようなことがあったならば、いまだこのように従っている私ではない。私の手で暴いてしまったことだろう(*『受難の現場』世界基督教統一神霊協会・歴史編纂委員会編著 成和社、176 p)。

300 第一条：「血統は汚してはならない」第二条：「人権を蹂躪してはならない」第三条：「公金を盗んではいけない」(2001年1月13日の文師の説教から)。

304~306P 私たち五人は西大門刑務所の未決囚が収監される三舎と四舎の監房にそれぞれ入れられました。……でも自分のことよりも常に信徒たちのことを第一に考えられたので、それができたのです(『TODAY'S WORLD』米国・統一教会の月刊誌、1982年9月号の金元弼氏の「ソウル教会の歴史」参照。筆者の金元弼氏へのインタビューから、1996年11月7日、東京で)。

309P 「私が韓国だけで裁判を受けると思っているのか！ これから世界的な裁判の場

が私の前に迫ってくる。しかし私は神のみ旨を成し遂げる時まで少しも屈することなく、ひるまずこの道を行く」(*『梁允永 回顧録』同、226 p)。

311P 「統一教会と国が行く道が危険なので『個人のために待ってはならない。妻も貴いが、国を生かすためには離婚しなさい』と言ったのです」(『ファミリー』同、2006年9月号、31 p)。

二、 韓鶴子女史の誕生と文師との結婚

313P 「私(金聖道)は神が任せてくださったみ旨を成し遂げることができなければ、……そのような教会が現れたなら真の教会であると思って訪ねていきなさい」(*『統一世界』同、1983年9月号、102 p)。

313P 金聖道氏の愛弟子(第一弟子、第二弟子)が洪順愛女史と許孝彬氏であった(『ファミリー』同、1997年11月号 66 p)。

314P 「洪唯一の娘(洪順愛)よ、喜びなさい! あなたの子が男の子なら宇宙の王になり、女の子なら宇宙の女王になるだろう」(*『忠心奉天の道』歴史編纂委員会編著、成和出版社、41 p)。

314P 韓承雲氏は初期の新イエス教会の中央宣導院において、……その間の功績が国や機関から認められ、大統領功労牌(一九七三)、大韓教育連合会長功労表彰状を受賞、国民勲章冬佰章を受勲(一九七四)した(*『真の父母様の生涯と摂理2』同、20~38 p 参照)。

【注】韓承雲の漢字の表記について。*『南平文氏大同譜巻九』(長淵書院)では、韓鶴子女史の父親は「韓承雲」と記されている。また生前、洪順愛大母様は夫の名前を記すときは「韓承雲」と書かれた。韓国統一教会では「韓承運」と表記していることもある。

315P 「その子は主の娘であり、あなたは乳母と同じである。神から預かって代わりに育てるといふ思いで育てなければならない」(*『忠心奉天の道』歴史編纂委員会編著、成和出版社、56 p)。

316P 夢にきれいな藁葺きの小さな家が現われた。……「私が六千年間おまえ一人を捜すため、このように勉強しているのだ」(『ファミリー』同、1997年11月号、69 p)。

318P このとき韓女史一行を乗せたトラックがその橋を渡りきって、五メートルほど行ったところで橋が爆破された(*『郷愁』同、313 p 参照)。

318P 「六月二八日午前二時一五分に予告もなく、……爆破で五百から八百余名が犠牲になったものと推定された」(*『漢江史』ソウル特別市史編纂委員会編著、ソウル特別市発行、932 p)。

318~319P 「生活記録簿」……「卒業後の状況欄」「家庭貧困により家事手伝い」(『忠心奉天の道』(日本語版)成和出版社、160~161 p)。

320P 「行動発達」……「総合評価」「成績は最も優秀で、行動面では断然模範的であるが、身体が弱くて欠席することがあり、家庭環境ゆえに憂鬱そうにしている」(『忠心奉天の道』(日本語版)成和出版社、192~193 p)。

320～321P 「篤実なキリスト教の家庭で育った私は、……聖別するための天の準備だったということを知りましたが、当時としては何も分かりませんでした」(『真の愛の勝利者』成和出版社、312～313 p)。

323P 「お母様(韓鶴子女史)は、教会の外にある教会員の家を借りて生活していました。……困難で孤独な息が詰まるような三年間を生きられました」(『真の母の七年路程と日本』文鮮明・韓鶴子・他著、光言社、2008年 沈明玉先生の講話、16～18 p 参照)。

323～324P 「リンゴを買うと言っても、いつも一個しか買えませんでした。……このような祈りばかりを継続して行いました」(『ファミリー』同、2007年9月号、41～42 p)。

324～326P 「きょう私たちが記念している聖婚式が挙行されたのは、一九六〇年四月一日(陰暦三月一六日)でした。……私に必要なことは、真に倦むことのない不屈の信仰と決意と忍耐であり、それが今日の私自身をつくり上げたといえるでしょう」(『愛の世界』世界基督教統一神霊協会、光言社、20～25 p からの抜粋)。

327～328P 「この国と人類は私の教えを受け入れなければなりません。……私は再臨主であり、救い主であり、真の父母として使命を果たしてきたのです。時が来たので、このことをこの場で宣布するのです」(『真の家庭と世界平和』世界基督教統一神霊協会編著、光言社、67、75～76 p)。この講演文は、1992年7月6日から同月9日まで韓国4大都市で開催された「世界平和女性連合」全国指導者大会におけるものである。

【参考】文鮮明師が再臨主(メシヤ)であることを初めて宣布したのが、1992年7月3日(統一グループの指導者会議において)。韓国4大都市(同年7月6～9日)における「メシヤ宣布」に続いて、同年8月24日、第1回「世界文化体育大典」の晩餐会において「メシヤ宣布」する。

329P 「キリストはいまだ来たりたまわない。……そして昨年(一九一九)より今年(一九二〇)にわたりて、再臨の兆は最もあざやかに世界歴史の上に現われた」(『内村鑑三信仰著作全集13』山本泰次郎編者、教文館、112 p)。

330～331P 「私の夫の活動は広く関心を集めていますが、……彼と一日だけでも一緒に過ごしたならば、すぐにそのことを御自身で確信するようになるでしょう」(『真の愛の勝利者』同、354 p)。

330P 「私が霊界に入るとき、……『永遠の祝福がお前にあるよう祈る!』と言ってくださるその一日が願いです」(『人間の生と霊魂の世界』文鮮明著、光言社、412 p)。

おわりに

332P それまでは一六時間四七分と言われていた(2004年5月13日、2009年6月1日の文師の説教から)

334～335P その中の一人サム・マシラモニー牧師は……それは「レバランド・ムーンは預言者ではなく、再臨主(真の父母)である」ということであった(『ファミリー』同、2003年8月号、63～67 p 参照)。

336P 「天一國眞聖德皇帝億兆蒼生萬勝君皇」(文師の揮毫)

【参考】2006年6月13日、韓国において「天正宮博物館奉獻式および天宙平和の王眞の父母様戴冠式」が挙行された。後日、文師は6月13日の日付で「天一國眞聖德皇帝億兆蒼生萬勝君皇太平聖代萬事亨通」と揮毫された。棺に記された言葉は、その揮毫の一部である。